

Sun Java™ System Application Server Enterprise Edition リリースノート (Microsoft Windows 版)

バージョン 8.1 2005Q4

Part No. 819-5815

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 製品は、Web サービスアプリケーションの構築と管理を大幅に簡素化します。ソフトウェア障害やハードウェア障害が発生した場合にも稼働を続けられるスケーラブルなサービスなので、優れたパフォーマンス、クラスタリング、および高可用性を実現する機能を提供します。Application Server を使って Web サービスを開発すれば、開発プロセスが単純になるだけでなく、独自の方法で柔軟に進化させることもできます。

このリリースノートには、Microsoft Windows 版 Sun Java System Application Server 8.1 2005Q4 製品のリリース時点での重要な情報を記載しています。ここでは、コンポーネント要件、プラットフォーム概要、既知の問題点、およびその他の最新の問題について説明します。Application Server 製品をご使用になる前に、このリリースノートをお読みください。

このリリースノートの最新版は、Sun Java System のマニュアルサイト <http://docs.sun.com/app/docs/prod/entsys.05q1#hic> を参照してください。ソフトウェアのインストールおよびセットアップを行う前に、この Web サイトを確認してください。また、それ以降も定期的にこのサイトをチェックして、最新のリリースノートや製品マニュアルを参照してください。

このリリースノートには、次の内容が含まれています。

- [リリースノートの変更履歴](#)
- [Application Server 8.1 2005Q4 の概要](#)
- [このリリースで修正されたバグ](#)
- [重要情報](#)
- [既知の問題と制限事項](#)
- [再配布可能なファイル](#)
- [問題の報告およびフィードバックの方法](#)
- [補足情報](#)

このリリースノートでは、関連情報が提供されているサードパーティーの URL も示しています。

注 Sun は、このマニュアルに記載されているサードパーティーの Web サイトが使用可能かどうかについて責任を負いません。これらのサイトまたはリソースから得られるコンテンツ、広告、製品、またはその他の資料について、Sun はなんら保証するものではなく、いかなる責任も負いません。こうしたサイトまたはリソースから取得したコンテンツ、商品、サービスを利用または信頼すること起因する損害または損失について、Sun は一切の責任を負いません。

リリースノートの変更履歴

ここでは、Application Server 2005Q4 コンポーネントの初版リリース以降に各リリースノートで加えられた変更点を示します。

表 1 変更履歴

変更日	説明
2006 年 2 月	商用リリース。
2005 年 11 月	ベータリリース。

Application Server 8.1 2005Q4 の概要

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 は、大規模な本稼働環境において J2EE アプリケーションおよび Java テクノロジベースの Web サービスを開発および配備するための、J2EE 1.4 プラットフォーム互換サーバーです。

詳細は次のとおりです。

- [Application Server 8.1 2005Q4 の新機能](#)
- [ハードウェアとソフトウェアの要件](#)
- [関連マニュアル](#)

Application Server 8.1 2005Q4 の新機能

Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 Update 2 には、次の拡張機能が含まれています。

- **改善された管理機能** - Application Server では、複数のマシンで構成される複雑なエンタープライズ配備を、セキュリティー保護された状態でリモート管理できます。このリモート管理には、ブラウザベースのコンソールか、スクリプトを使用できるコマンド行インタフェースを使用することができます。また、セキュリティー保護された状態でリモートから管理および監視機能にプログラムアクセスするための JMX ベースの豊富な API も用意されています。
- **メッセージブローカ** - Application Server には、高可用性、信頼性、高パフォーマンス性を備えたスケーラブルなメッセージングを実現する、統合エンタープライズクラスのメッセージブローカが含まれています。
- **プラットフォームサポートの拡張** - サポートするオペレーティングシステム、データベース、ロケール、およびハードウェアが追加されています。
- **Sun Java Enterprise System** - Sun Java Enterprise System の主要な構成要素として、Application Server はポータルサービスおよびネットワークアイデンティティサービスと緊密に統合されています。
- **移行ツールとアップグレードツール** - これらのツールにより、J2EE アプリケーションの規格合致性および移植性を保証し、別の J2EE Application Server (JBoss、WebLogic、WebSphere) からの移行に役立ち、以前のバージョンの Sun ONE Application Server や iPlanet Application Server からのアップグレードを支援することが可能になります。
- **Java 2 Standard Edition 5.0 のサポート** - Application Server は、拡張された管理および監視機能とパフォーマンスおよびスケーラビリティについての改善点を数多く含む Java 2 Standard Edition 5.0 をサポートしています。
- **Java Web Services Developer Pack 1.6 (JWSDP) のプラグインサポート** - すべての JWSDP プラグインがサポートされるようになりました。JWSDP 1.6 は、Java Download Center (<http://java.sun.com/webservices/downloads/webservicespack.html>) から無料でダウンロードできます。
- **JDBC ドライバ** - Application Server には、Sun の JDBC ドライバが付属しています。
- **Web サービスセキュリティー** - これらのコンテナメッセージのセキュリティーメカニズムは、SOAP Web サービス呼び出しのメッセージレベルでの認証 (たとえば XML 電子署名および暗号化) を、OASIS WS-Security 規格の X509 およびユーザー名 / パスワードのプロファイルによって実装しています。
- **WS-I Basic Profile 1.1** - J2EE 1.4 の仕様で規定されているように、このリリースは Web サービスアプリケーションの相互運用を可能にするための Web Services Interoperability (WS-I) Basic Profile 1.1 を実装しています。
- **iWay アダプタによるバックエンド接続** - Sun Microsystems は、現時点で 22 の iWay アダプタを、主要なバックエンドシステム (SAP、Siebel、Oracle、CICS、および IBM MQ Series) 向けに再販およびサポートしています。これは、Application Server 環境内から既存の IT アプリケーションを利用できるようにするためです。これらのアダプタは、J2EE Connector Architecture 1.5 仕様と Web サービス (SOAP) 規格をサポートしており、バックエンドアプリケーションに接続するための時間を節減する開発者ツールを含んでいます。

- **最新の HADB 管理システム** – Sun Java Enterprise System は、新しい高可用性データベース (HADB バージョン 4.4-2.7) を備えています。HADB の要件と制限事項の詳細は、『高可用性 (HA) ガイド』を参照してください。
- 新しい管理コマンド `hadbm setadminpassword` が実装され、データベース管理に使用されるパスワードが変更できるようになりました。このコマンドは、使用する管理エージェントを示すオプションと、古いパスワードおよび新しいパスワードを取ります。詳細は、`hadbm setadminpassword` のマニュアルページを参照してください。
- 既存の管理コマンド `hadbm listpackages` が変更されています。以前は、このコマンドはオペランドを取らず、関連する管理ドメイン内のすべてのパッケージを表示していました。変更によって、オプションのパッケージ名オペランドが導入され、その名前を持つパッケージのみが表示されます。そのオペランドが指定されない場合は、すべてのパッケージが表示されます。詳細は、`hadbm listpackages` のマニュアルページを参照してください。
- 既存の管理コマンド `hadbm createdomain` が変更されています。`hostlist operand` が拡張され、管理エージェントのポート番号も指定できるようになりました。このように、`hostlist` オペランドのみを使用してドメインを完全に指定できます。下位互換性のために古い動作も引き続きサポートされています。詳細は、`hadbm createdomain` のマニュアルページを参照してください。
- 管理システムからのエラーメッセージの一部が変更されています。これらの変更は、エラーメッセージのわかりやすさ、一貫性、および正確性を向上させることを目的にしています。実際の変更は、このリリースノートには示されていません。

Application Server 製品リリース

Application Server 製品はさまざまな方法で提供されます。次の表に、さまざまな配布方法で提供される製品を示します。

Application Server 製品リリース	配布方法
Sun Java Enterprise System 内の Application Server Enterprise Edition コンポーネント	Sunsolve 経由でインストールが必要なパッチのファイルベースでの配布

J2EE のサポート

Sun Java System Application Server 8.1 2005Q4 は、J2EE 1.4 プラットフォームをサポートしています。J2EE 1.4 プラットフォームで利用できる拡張 API を、次の表に示します。

表 2 J2EE 1.4 プラットフォームで変更になった主要な API

API	説明
コンポーネント	

表 2 J2EE 1.4 プラットフォームで変更になった主要な API (続き)

API	説明
Application および Application Client	XML スキーマによる標準配備記述子の実装
Enterprise JavaBeans (EJB) 2.1	タイマーサービスと EJB Web サービスエンドポイント
Java Servlet 2.4	Web サービスエンドポイントのフィルタ
JavaServer Pages (JSP) 2.0 アーキテクチャー	式言語とタグライブラリ
J2EE Connector Architecture 1.5	着信リソースアダプタと Java Message Service (JMS) プラグイン可能性
Web サービス	
Java Web Services Developer Pack 1.5	XML アプリケーション、Web サービス、および Web アプリケーションを構築、テスト、および配備するための統合ツールキット
Java API for XML-based Remote Procedure Calls (JAX-RPC) 1.1	WSDL と Java テクノロジーのマッピングと、Web サービスクライアントおよびエンドポイントの開発のサポート
WS-I Basic Profile 1.0	WSDL と SOAP による相互運用の有効化要素
SOAP with attachment API for Java (SAAJ) 1.2	SOAP ベースのメッセージングのための API で、ファイルの添付された SOAP メッセージの作成を促進します
Java APIs for XML Registries (JAXR) 1.0	Universal Description Discovery and Integration (UDDI および ebXML) などの XML レジストリにアクセスするための統一された標準 API
その他	
J2EE Deployment 1.1	J2EE のコンポーネントおよびアプリケーションの配備を可能にする標準 API
J2EE Management 1.0	J2EE プラットフォームを管理するための情報モデルの定義
Java Management Extensions (JMX) 1.2	標準的な管理 API
Java Authorization Contract for Containers (JACC) 1.0	J2EE Application Server と 認証ポリシープロバイダとの間でのセキュリティー規約の定義
Java API for XML Processing (JAXP) 1.2	XML ドキュメントを解析および変換するための API で、XML スキーマの処理もサポートします
JMS 1.1	J2EE アプリケーションコンポーネントがメッセージを作成、送信、受信、および読み取りできるためのメッセージング標準で、キューとトピックのための統一された API もサポートします
JavaMail 1.3	メールシステムをモデル化する抽象クラスの集合で、API の小規模なアップデートも含まれます

高パフォーマンス

Application Server は、高パフォーマンスの EJB コンテナ、Web コンテナ、および Web サービスを組み込んでおり、Sun Java System Message Queue ソフトウェアによる並行メッセージデリバリーをサポートします。

スケーラビリティ

Application Server は、サーバーインスタンスのクラスタ化と要求の負荷分散による水平方向のスケーラビリティをサポートします。同時に、マルチプロセッサの大規模マシンをサポートする最高級の垂直方向スケーラビリティも実現します。統合メッセージブローカは、より高度なスケーラビリティと可用性のためにクラスタ化できます。HTTP クライアント、RMI/IIOP ベースのリッチクライアントアプリケーション、Web サービスクライアント、および JRM クライアントからのクライアントアクセスは、Application Server クラスタに負荷分散できます。

高可用性

Application Server には、HTTP、IIOP、および JMS クライアント向けの負荷分散、HTTP セッションのフェイルオーバーのサポート、EJB クラスタリングおよびフェイルオーバーのサポート、高可用性 EJB タイマー、分散トランザクションリカバリ、アプリケーションのローリングアップグレードのサポート、および J2EE アプリケーションの一時的な状態を保存するための高可用性データベースが組み込まれています。

可用性により、クラスタ内の Application Server インスタンスのフェイルオーバー保護が可能になります。ある Application Server インスタンスがダウンすると、そのサーバーに割り当てられていたセッションを別の Application Server インスタンスが引き継ぎます。セッション情報は、HADB に格納されます。HADB は、HTTP セッションの持続性、ステートフルセッション Bean、およびシングルサインオン資格をサポートします。

JavaServer Faces 1.1 のサポート

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 は、JavaServer Faces 1.1 テクノロジーをサポートしています。JavaServer Faces テクノロジーは、自身の状態、イベント、ハンドリング、および入力チェックを管理するユーザーインタフェースコンポーネントに対応する一連のサーバーサイド API から成ります。これらの API は、ページナビゲーションを規定し、国際化とアクセシビリティをサポートします。JSP のカスタムタグライブラリを使って、カスタム UI コンポーネントを追加することもできます。

JavaServer Faces テクノロジーで開発している間、開発チームの各メンバーは、処理の一部分にだけ集中することができます。単純なプログラミングモデルでは、これらの部分をつなぎ合わせるにより、ずっと効率的でシンプルな開発サイクルが実現されます。

ハードウェアとソフトウェアの要件

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 製品をインストールする前に満たしている必要のある要件を示します。

- [プラットフォーム要件](#)
- [JDBC ドライバとデータベース](#)
- [Oracle の設定](#)
- [PointBase の設定](#)
- [Web サーバー](#)
- [ブラウザ](#)
- [高可用性の要件と制限事項](#)
- [その他の要件](#)

プラットフォーム要件

次の表に、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 製品がサポートするオペレーティングシステムを示します。また、Application Server をインストールして実行するための最小および推奨のメモリー要件も示します。

表 3 Sun Java System Application Server 8.1 2005Q4 のプラットフォーム要件

オペレーティングシステム	最小メモリー	推奨メモリー	最小ディスク容量	推奨ディスク容量	JVM
Microsoft Windows 2000 Advanced Server Service Pack 4+	512M バイト	1G バイト	250M バイトの空き領域	500M バイトの空き領域	JDK 1.5.0.04
Microsoft Windows 2003 Enterprise Server	1G バイト	2G バイト	250M バイトの空き領域	500M バイトの空き領域	JDK 1.5.0.04
Microsoft Windows XP	1G バイト	2G バイト	250M バイトの空き領域	500M バイトの空き領域	JDK 1.5.0.04

オペレーティングシステムのバージョンを調べるには、`ver` コマンドを使用します。ディスクスペースの使用量を調べるには、`mem` コマンドを使用します。

JDBC ドライバとデータベース

Sun Java System Application Server は、対応する JDBC ドライバを持つ任意の DBMS への接続をサポートするように設計されています。Sun がテストし、J2EE 準拠のデータベース設定を行うのに使用できることが確認されたコンポーネントを、次の表に示します。

表 4 JDBC ドライバとデータベース

JDBC ベンダー	JDBC ドライバのタイプ	サポートされるデータベースサーバー
i-net Software	Type 4	Oracle (R) 8.1.7、9i、9.2.0.3 Sybase ASE 12.5.2 Microsoft SQL Server 2000 4.0 Service Pack 1
IBM	Type 2	IBM DB2 8.1 Service Pack 3+
PointBase	Type 4	PointBase Network Server 4.8
DataDirect	Type 4	Oracle (R) 8.1.7、9i、9.2.0.3 Sybase ASE 12.5.2 Microsoft SQL Server IBM DB2 8.1 Service Pack 3+
Sun Java System JDBC Driver for Oracle	Type 4	Oracle (R) 9.2.0.3、10G
Sun Java System JDBC Driver for DB2	Type 4	IBM DB2 8.1 Service Pack 3+
Sun Java System JDBC Driver for Sybase	Type 4	Sybase ASE 12.5.2
Sun Java System JDBC Driver for Microsoft SQL Server	Type 4	Microsoft SQL Server 2000 4.0 Service Pack 1
Oracle	Type 4、Type 2	Oracle (R) 9.2.0.3、10G

i-net Software については、次の URL を参照してください。

<http://www.inetsoftware.de/>

次の表に、追加でサポートされる JDBC ドライバを示します。ただし、これらのドライバは J2EE に準拠していません。

表 5 J2EE 準拠でない JDBC ドライバ

JDBC ベンダー	JDBC ドライバのタイプ	サポートされるデータベースサーバー
Oracle	Type 4	Oracle (R) 9.2.0.3、10G
Sybase	jConnector	Sybase ASE 12.5.1

追加のドライバは、JDBC Driver Certification Program にて J2EE 1.4 プラットフォームの JDBC 要件を満たしていることがテストされています。これらのドライバは、Sun Java System Application Server の JDBC 接続に使用されます。Sun では、これらのドライバの製品サポートを提供していませんが、Sun Java Enterprise System Application Server でのこれらのドライバの使用をサポートしています。

Oracle の設定

J2EE 1.4 準拠になるよう、Oracle JDBC ドライバを適切に設定する必要があります。Type 2 および Type 4 のドライバを次のように設定してください。

1. 9.2.0.3 以降の JDBC ドライバを使用します。
2. Oracle データベースのパラメータファイル (init.ora) に `compatible=9.0.0.0.0` またはそれ以上の値を加えます。
3. `ojdbc14.jar` ファイルを使用します。
4. Application Server の設定を変更して JVM のプロパティを次のように定義します。

```
-Doracle.jdbc.J2EE13Compliant=true
```

さらに、Type-2 のドライバについては、変数 `ORACLE_HOME` および `PATH` (ここには `$ORACLE_HOME/lib` が含まれているべき) を Application Server が起動される環境に定義する必要があります。たとえば、これらを `asenv.conf` ファイルに追加し、必ずエクスポートされるようにします。

PointBase の設定

多くのサンプルアプリケーションは、Application Server に付属の PointBase データベースサーバーを使用しています。Application Server Enterprise Edition を使用する場合、事前に PointBase データベースサーバーを設定する必要があります。Application Server で PointBase を使用する前に、サポートされている組み合わせを確認してください。

表 6 J2SE と PointBase のサポートされている組み合わせ

Application Server	PointBase
サポート済み	
J2SE 5.0	J2SE 1.4.2
未サポート	
J2SE 5.0	J2SE 5.0
J2SE 1.4	J2SE1.4

PointBase を設定するには、次の 2 つの方法があります。

- 環境変数 `JAVA_HOME` を、J2SE の場所に設定します。Application Server8.1 に含まれる PointBase 実装は、J2SE 1.4.2 でだけサポートされます。
- Application Server の PointBase 設定ファイルを編集します。

第 1 の方法を使うには、次の手順を実行してください。

1. 使用する J2SE がインストールされていることを確認します。
まだインストールされていない場合には、J2SE 1.4.2 をダウンロードします。
2. オペレーティングシステムおよびシェル of 適切なコマンドを使って、環境変数 `JAVA_HOME` を J2SE がインストールされているディレクトリに設定します。次に例を示します。

```
set JAVA_HOME=<JDK1.5_INSTALLDIR>
```

第 2 の方法を使う場合、その手順はオペレーティングシステムによって異なります。

Solaris および Linux

設定ファイル `install_dir/pointbase/tools/serveroption/pbenv.conf` で、次の行を編集します。

```
PB_JAVA=%%%PB_JAVA%%%
```

この行を、次のように変更します。

```
PB_JAVA=J2SE_location
```

ここで `J2SE_location` は、J2SE がインストールされているディレクトリです。Application Server と一緒に J2SE をインストールした場合、J2SE はデフォルトで `install_dir/jdk` にインストールされます。この変更を加えたあとで、`startserver` スクリプトを使って PointBase を起動できます。

Windows

設定ファイル `install_dir\pointbase\tools\serveroption\pbenv.bat` で、次の行を編集します。

```
set PB_JAVA=%%%PB_JAVA%%%
```

この行を、次のように変更します。

```
set PB_JAVA=J2SE_location
```

ここで `J2SE_location` は、J2SE がインストールされているディレクトリです。Application Server と一緒に J2SE をインストールした場合、J2SE はデフォルトで `install_dir\j2se1.4` にインストールされます。この変更を加えたあとで、`startserver.bat` を実行することによって PointBase を起動できます。

Web サーバー

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 向けにサポートされている Web サーバーを示します。

表 7 サポートされている Web サーバー

Web サーバー	バージョン	オペレーティングシステム
Sun Java System Web Server	6.1 +	Solaris SPARC 8、9、10 Solaris x86 9、10 Red Hat Enterprise Linux 2.1 Update 2、3.0 Update 1

ブラウザ

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 でサポートされているブラウザを示します。

表 8 サポートされているブラウザ

ブラウザ	バージョン
Mozilla	1.4、1.5、1.6、1.7.x
Netscape Navigator	4.79、6.2、7.0
Internet Explorer	5.5 Service Pack 2、6.0

高可用性の要件と制限事項

Sun Java System Application Server の高可用性コンポーネントを設定する前に、次の高可用性要件を満たしている必要があります。

- HADB が Application Server で正常に動作するには、最小で 512M バイトのメモリー、推奨で 1G バイトのメモリーが必要になる。
- HADB は IPv4 しかサポートしない。
- UDP マルチキャスト用にネットワークを設定する必要がある。
- 新しい HADB 管理システムでは、8 台以上のホストを処理すると問題が発生する可能性がある。

その他の要件

Sun Java System Application Server ソフトウェアをインストールする前に、次の要件も満たしている必要があります。

- **空き領域**：最低でも、Sun Java System Application Server のインストール用に 300M バイト、SDK のインストール用に 250M バイトの空き領域が、一時ディレクトリに必要です。

- **アンインストールプログラムの使用** : システムから Application Server を削除する必要がある場合には、ソフトウェアに付属のアンインストールプログラムを使用することが重要です。他の方法を使って削除すると、同じバージョンの再インストールや新しいバージョンのインストールを行うときに問題が発生する可能性があります。
- **空きポート** : 利用可能な未使用ポートが 7 つ必要です。
 - インストールプログラムは、使用されているポートを自動的に検出し、その時点で未使用のポートをデフォルトの設定として示します。デフォルトでは、HTTP サーバーについては 8080 (admin インスタンス用) と 38080 (AppServer1 インスタンス用)、管理サーバーについては 4850 が初期デフォルトポートです。
 - インストールプログラムは、使用されているポートを検出し、それ以外の 2 つを割り当てようとしています。それは、Sun Java™ System Message Queue (デフォルトで 7679) と、IIOP (デフォルトで、IIOP は 3750、IIOP/SSL は 3347 と 3360) です。これらのデフォルトポート番号が使用されている場合、インストールプログラムは動的ポートの範囲から無作為にポート番号を割り当てようとしています (これは利用可能な次のポート番号とはかぎらない点に注意)。
- **インストール済みサーバーの起動** : すでにインストールされているサーバーを置き換える場合を除いて、Application Server8.1 のインストール処理を開始する前に、インストール済みのサーバーを起動する必要があります。インストールプログラムが使用中のポートを検出するため、使用中のポートがほかの目的に使用されることはありません。
- **ファイアウォールのシャットダウン** : Sun Java System Application Server ソフトウェアをインストールする前に、すべてのファイアウォールを停止する必要があります。一部のファイアウォールソフトウェアはデフォルトですべてのポートを無効にするからです。インストールプログラムは、使用可能なポートを正確に検出できる必要があります。

関連マニュアル

Sun Java System Application Server のマニュアルセットでは、次の製品リリースについて説明しています。

- Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q1
- Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2
- Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2

特に指定がない限り、マニュアル内でどちらかの製品リリースについて説明しているときは常に、両方のリリースを含んでいます。

これらのリリースノート以外に、Application Server コンポーネントには完全なマニュアル一式がそろっています。次の URL を参照してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1310.1>

次の表に、Application Server コアアプリケーションのマニュアルセットに含まれるものを要約して示します。

表 9 マニュアルセットの内容

マニュアルのタイトル	説明
『リリースノート』	ソフトウェアおよびマニュアルについての最新情報。サポートするハードウェア、オペレーティングシステム、JDK、および JDBC/RDBMS についての包括的な表を基にした要約を含みます。
『クイックスタートガイド』	Sun Java System Application Server 製品をはじめて使われる方のための入門。
『インストールガイド』	Sun Java System Application Server ソフトウェアとそのコンポーネントのインストール。
『配備計画ガイド』	最適な方法で確実に Sun Java System Application Server を導入するための、システムニーズや企業ニーズの分析。Application Server を配備する場合に注意する必要がある一般的な問題と懸案事項についても解説します。
『Developer's Guide』	Sun Java System Application Server 上で動作することを目的とし、J2EE コンポーネントおよび API のオープン Java スタンドモデルに準拠した、Java™ 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE™ プラットフォーム) アプリケーションの作成と実装。開発ツール、セキュリティー、アセンブリ、配備、デバッグ、ライフサイクルモジュールの作成などについての全般的な情報も提供します。
『J2EE 1.4 Tutorial』	J2EE アプリケーションを開発するための J2EE 1.4 プラットフォームテクノロジーおよび API の使用と、それらアプリケーションの Sun Java System Application Server への配備。
『管理ガイド』	Sun Java System Application Server サブシステムおよびコンポーネントの、管理コンソールからの設定、管理、および配備。
『高可用性 (HA) 管理ガイド』	高可用性データベースのための、インストール後の設定と管理に関する解説。
『Administration Reference』	Sun Java System Application Server 設定ファイル domain.xml の編集。
『Upgrade and Migration Guide』	新しい Sun Java System Application Server プログラミングモデルへのアプリケーションへの移行 (特に Application Server 6.x または 7 からの移行)。このマニュアルでは、隣接する製品リリース間の相違点と、製品仕様との不一致を招く可能性のある設定オプションについても説明します。
『Performance Tuning Guide』	パフォーマンスを改善するための Sun Java System Application Server のチューニング。

表 9 マニュアルセットの内容 (続き)

マニュアルのタイトル	説明
『Troubleshooting Guide』	Sun Java System Application Server におけるトラブルの解決。
『Error Message Reference』	Sun Java System Application Server のエラーメッセージの解決。
『Reference Manual』	Sun Java System Application Server で使用できるユーティリティーコマンド。マニュアルページのスタイルで記述されています。asadmin コマンド行インタフェースも含まれます。

このリリースで修正されたバグ

次の表に、Application Server 8.1 2005Q4 で修正されたバグを示します。

表 10 Application Server 8.1 2005Q4 で修正されたバグ

バグ番号	説明
6295958	AS マスターパスワードが入力できない。また、マスターパスワードがユーザーに不明。 注: マスターパスワードは、インストール中に自動的に設定モードでは管理者パスワードと同じになるのに対して、 Configure Manually after Installation モードでは、ユーザーが CLI で異なるパスワードを指定できません。

重要情報

ここでは、次の内容について説明します。

- [互換性に関する問題](#)
- [Deploytool](#)
- [ベリファイア](#)
- [クラスローダの変更](#)
- [Web サービスのセキュリティー設定](#)
- [障害者のためのアクセシビリティー機能](#)

互換性に関する問題

Sun Java System Application Server Enterprise Edition の次のメジャーリリースでは、次に示す非互換性が導入されます。

- HTTP サービスでは、パフォーマンス向上のために引き続き DNS キャッシュが使用されますが、DNS キャッシュの監視は使用できなくなります。
- HTTP ファイルのキャッシングのサポートは修正され、その結果、設定および監視が変更されます。
- アクセスログローテーションのサフィックスの形式は、`http://java.sun.com/j2se/1.5.0/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html` に指定されている日付と時刻オブジェクトでサポートされている形式に変更されます。このリリースでのデフォルト値、「`%YYYY;%MM;%DD;-%hh;h:mm;m:ss;s`」は引き続きサポートされますが、その他の種類はサポートされません。
- サポートされなくなる `domain.xml` の要素、属性、およびプロパティはすべて、サーバーログでは警告として、またアップグレードファイルでは、非推奨としてフラグが付けられます。
- `server.http-service.dns` ノードは、監視ビューでは使用できなくなります。
- `server.http-service.file-cache` ノードの属性の一部は、削除される可能性があります。その結果、これらのノードから削除された属性にアクセスしようとする `asadmin` 監視コマンドはすべて失敗します。

Deploytool

Deploytool は使用できなくなります。これと同等の機能は、NetBeans IDE にあります。この詳細および移行の計画については、<http://www.netbeans.org/kb/41/j2ee-tut/index.html> にある NetBeans 4.1 用の J2EE 1.4 チュートリアルを参照してください。

ベリファイア

- ベリファイアの GUI モード (`verifier -u` で起動される) は使用できなくなります。これと同等の機能は、NetBeans IDE にあります。
- ベリファイアツールを使用する場合のアプリケーション検証のデフォルトモードは、「J2EE ルールの検証」から「J2EE ルールおよび Sun Application Server 設定ルールの検証」に変更されます。つまり、ベリファイアはデフォルトでは、アプリケーションが J2EE ルールを満たしているかどうか、および Sun Application Server 上で動作するように設定されているかどうかをテストします。ベリファイアコマンドには、J2EE ルールのみに関してアプリケーションをテストするためのコマンド行スイッチが用意されています。

クラスローダの変更

現在のリリースでは、`domain.xml` (アプリケーションサーバーの設定ファイル) の `classpath-prefix`、`server-classpath`、および `classpath-suffix` 属性に追加された JAR およびディレクトリエントリは、JVM システムクラスパスで使用できます。この動作に依存しているアプリケーションは、クラス `java.lang.ClassLoader` の次のメソッドを使用して、JVM システムクラスパスのクラスやその他のリソースにアクセスしている可能性があります。

- `getSystemClassLoader()`
- `getSystemResource()`
- `getSystemResourceAsStream()`
- `getSystemResources`

次のメジャーリリースでは、`classpath-prefix`、`server-classpath`、および `classpath-suffix` に追加された JAR およびディレクトリエントリは、JVM システムクラスパスでは使用できなくなります。アプリケーションが前述のいずれかのメソッドを使用している場合は、システムパスでリソースが使用できることを前提としていない同等のメソッドを使用することを強くお勧めします。JVM システムクラスパスに依存しない同等のメソッドは、`java.lang.ClassLoader` にあり、可能な場合は使用するようしてください。次に例を示します。

例: 古いコード

```
java.net.URL url = ClassLoader.getSystemResource
("com/acme/tools/tools.properties");
```

例: 推奨される変更

```
java.net.URL url = this.getClass().getClassLoader().getResource
("com/acme/tools/tools.properties");
```

コードを変更できない場合は、次のリリースで追加される新しい設定オプションを使用して、JVM システムクラスパスを設定することができます。

Web サービスのセキュリティー設定

Web サービスのセキュリティーは、`wss-client-config.xml` および `wss-server-config.xml` ファイルを使用して設定できます。これらの設定ファイルの内容や名前は変更される可能性が高いことに注意してください。ただし、同等の機能は引き続き使用できます。

障害者のためのアクセシビリティ機能

このメディアの出版以降にリリースされたアクセシビリティ機能を手に入れるには、Sun に米国リハビリテーション法 508 条に関する製品評価資料を請求し、その内容を確認して、どのバージョンが、アクセシビリティに対応したソリューションを配備するためにもっとも適しているかを特定してください。更新バージョンのアプリケーションは、

<http://sun.com/software/javaenterprisesystem/get.html> にあります。

アクセシビリティに対する Sun の対応については、<http://sun.com/access> を参照してください。

既知の問題と制限事項

ここでは、Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 (Microsoft Windows 版) に関する既知の問題と制限事項について説明します。

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4 コンポーネントに関する既知の問題とその回避策を説明します。問題の説明にプラットフォームが明記されていない場合、その問題はすべてのプラットフォームに当てはまります。この節は次の項目から構成されています。

- [管理](#)
- [アプリケーションクライアント](#)
- [付属の Sun JDBC ドライバ](#)
- [コネクタ](#)
- [マニュアル](#)
- [ログ](#)
- [監視](#)
- [PointBase](#)
- [サンプル](#)
- [セキュリティ](#)
- [ロードバランサ](#)
- [設定](#)

管理

ここでは、管理上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

要約

6196993

バックアップ取得したドメインを別の名前では復元できない。

同一の **Application Server** 上でのドメインのミラー化は、`backup-domain` および `restore-domain` コマンドでは行えません。**asadmin**

`restore-domain` コマンドにはドメインをリネームするオプションがありますが、元の名前とは違う名前ではドメインを復元することはできないからです。バックアップ取得したドメインのリネームは正常に行われたように見えますが、そのリネームされたドメインの起動は失敗します。ドメイン設定のエントリは変更されておらず、`startserv` および `stopserv` は元のドメイン名を使ってパスを設定するからです。

解決法

`restore-domain` で使用するドメイン名は、元の `backup-domain` コマンドで使用したドメイン名と同じである必要があります。**Application Server 8.1** での `backup-domain` および `restore-domain` コマンドは、同一マシン上の同一ドメインのバックアップおよび復元についてだけ有効です。

バグ ID
6200011

要約

JMX エージェントを伴う Application Server の起動がサポートされていない。

Application Server では、J2SE 1.4.x または 5.0 以降を設定できます。J2SE 5.0 プラットフォームの重要な特徴は、JMX エージェントを起動できることです。サーバーの起動時にシステムプロパティを明示的に設定すると、JMX エージェントがアクティブになります。

次に例を示します。

```
name="com.sun.management.jmxremote" value="true"  
name="com.sun.management.jmxremote.port" value="9999"  
name="com.sun.management.jmxremote.authenticate"  
value="false"  
name="com.sun.management.jmxremote.ssl" value="false"
```

JMX プロパティを設定してからサーバーを起動すると、Application Server 仮想マシン内に新たな jmx-connector サーバーが起動します。これの望ましくない副作用として、管理機能が悪影響を受け、Application Server の管理コンソールおよびコマンド行インタフェースから予期できない結果が生じる場合があります。問題は、組み込みの jmx-connector サーバーと新たな jmx-connector サーバーとの間で衝突が発生することにあります。

解決法

jconsole または何らかの JMX 互換クライアントを使用する場合には、Application Server とともに起動する標準の JMX コネクタサーバーを再利用することを検討してください。

サーバーの起動時に、次に示すような行が server.log に作成されます。ここで指定されている JMXServiceURL に接続し、資格が正常に認識されたあとは、同様の管理および設定を行うことができます。

```
[#|2004-11-24T17:49:08.203-0800|INFO|sun-appserver-ee8  
.1|javax.enterprise.system
```

バグ ID

6236544, 6275436

要約

どの Web サーバーのエンドポイント URL を使用しても、ロードバランサの設定ファイルが作成されない。

Web サービスの URL をエクスポートする EJB モジュールを含むアプリケーションを使用してロードバランサを設定しても、作成された loadbalancer.xml ファイルに、その Web サービスのコンテキストルートが存在しません。

解決法

1. loadbalancer.xml ファイルを編集して、作成されなかった Web モジュールを次のように追加します。

```
<web-module context-root="context-root-name"
  disable-timeout-in-minutes="30" enabled="true"/>
```
2. context-root-name を、EJB として公開された Web サービスのコンテキストルート名に置き換えます。

アプリケーションクライアント

ここでは、アプリケーションクライアントに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

6193556

要約

アプリケーションクライアントアーカイブのライブラリ JAR が MANIFEST ファイルを上書きする。

クライアント JAR (たとえば reporter.jar) 内に最上位レベルの JAR ファイルがある場合、クライアント JAR を配備すると、その JAR の MANIFEST ファイルがクライアント JAR の MANIFEST ファイルを上書きします。

解決法

現時点ではありません。

付属の Sun JDBC ドライバ

ここでは、Sun の JDBC ドライバに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

6165970

要約

TRANSACTION_SERIALIZABLE 遮断レベルを Microsoft SQL Server 向けの付属の Sun ドライバとともに使用するアプリケーションは、2 つの並行トランザクションが実行されていて、その 1 つがロールバックされた場合、準備されているステートメントを使って更新するときにハングアップすることがあります。

希望の遮断レベルを接続に対して設定するには、対応する接続プールをその遮断レベルで作成する必要があります。接続プールの設定については、『管理ガイド』を参照してください。

解決法

現時点ではありません。

バグ ID
6170432

要約

PreparedStatement エラーが発生する。

説明1

1つのトランザクションで 3000 を超える PreparedStatement オブジェクトを生成する場合、DB2 では次のエラーが発生する可能性があります。

```
[sunm] [DB2 JDBC Driver] No more available statements. Please recreate your package with a larger dynamicSections value.
```

解決法1

次のプロパティを接続プール定義に追加して、ドライバが DB2 パッケージをより大きな動的セクション値に再バインドするようにします。

```
createDefaultPackage=true replacePackage=true  
dynamicSections=1000
```

接続プールの設定については、『管理ガイド』を参照してください。

説明#2

前述の PreparedStatement エラーに関連して、次のエラーメッセージがスローされることがあります。

```
[sunm] [DB2 JDBC Driver] [DB2]Virtual storage or database resource is not available.
```

解決法#2

DB2 サーバー設定パラメータ *APPLHEAPSZ* の値を増やします。適切な値は 4096 です。

説明3

遮断レベル TRANSACTION_SERIALIZABLE。アプリケーションが遮断レベル TRANSACTION_SERIALIZABLE を採用し、前述したパラメータの 1 つを使用している場合、そのアプリケーションは接続を取得するときにハングアップすることがあります。

解決法#3

希望の遮断レベルを接続に対して設定するには、対応する接続プールをその遮断レベルで作成する必要があります。詳しくは、『管理ガイド』を参照してください。

バグ ID
6189199

要約

Sybase Adaptive Server 用の付属の Sun ドライバでの遮断レベルの設定にかかわる問題。

TRANSACTION_SERIALIZABLE 遮断レベルを Sybase Adaptive Server 向けの付属の Sun ドライバとともに使用するアプリケーションは、2つの並行トランザクションが実行されていて、その1つがロールバックされた場合、準備されているステートメントを使って更新するときにハングアップすることがあります。接続ロールバックは次のメッセージとともに失敗し、ロールバックされた接続は、それ以降は使用できません。

```
java.sql.SQLException: [sunm] [Sybase JDBC Driver] Request cannot be submitted due to wire contention
```

Sybase Adaptive Server は TRANSACTION_REPEATABLE_READ 遮断レベルをサポートしません。ただし、DatabaseMetaData をクエリーすると、付属の Sun ドライバは、この遮断レベルがこのデータベースによってサポートされていると返答します。この遮断レベルを使用するアプリケーションは処理に失敗します。

付属の Sun ドライバを使用するアプリケーションは、TRANSACTION_READ_UNCOMMITTED 遮断レベルを設定できません。DataBaseMetaData に対する最初のアクセスの時点で、アプリケーションは次の例外をスローします。

```
java.sql.SQLException: [sunm] [Sybase JDBC Driver] [Sybase] The optimizer could not find a unique index which it could use to perform an isolation level 0 scan on table 'sybssystemprocs.dbo.spt_server_info'.
```

解決法

現時点ではありません。

コネクタ

この節では、J2EE のコネクタアーキテクチャーに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

要約

6188343

DAS インスタンスを再起動したあと、`cascade` が `false` に設定されている場合にコネクタモジュールの配備取り消しが失敗する。

このシナリオでは、スタンドアロンまたは埋め込みのコネクタモジュールが DAS とコネクタ接続プールに配備され、その配備済みモジュール用にリソースが作成されます。DAS インスタンスを再起動したあと、`cascade` が `false` に設定されている場合にコネクタモジュールの配備取り消しが次の例外で失敗します。

```
[#|2004-10-31T19:52:23.049-0800|INFO|sun-appserver-ee8
.1|javax.enterprise.system
.core|_ThreadID=14;|CORE5023: Error while unloading
application [foo]|#]
```

解決法

DAS インスタンスを再起動したあとは、スタンドアロンまたは埋め込みのコネクタの配備を取り消すために、カスケード式配備取り消しを使用 (`cascade` オプションを `true` に設定) します。

マニュアル

ここでは、マニュアル上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

要約

さまざまな ID

Javadoc に矛盾がある。

いくつかの AMX インタフェースおよびメソッドについて、Javadoc が欠けているか間違っています。

NumConnAcquired および NumConnReleased 統計情報の取得メソッドが ConnectorConnectionPoolStats および AltJDBCConnectionPoolStats から抜けている。これらの取得メソッドは、将来のリリースで `getNumConnAcquired()` および `getNumConnReleased()` として追加される予定。

EJBCacheStats 内でメソッド `getPassivationSuccesses()`、`getExpiredSessionsRemoved()`、`getPassivationErrors()`、または `getPassivations()` を呼び出すと、例外がスローされる。これは将来のリリースで解決される予定。

サーバーを起動したあと、すべての AMX MBeans が登録されて利用できるようになるまでに数秒を要することがある。将来のリリースでは、AMX MBeans が完全にロードされたことを確認できるようになる予定。

定数 `XTypes.CONNECTOR_CONNECTION_POOL_MONITOR` のスペルが間違っている (「NNN」の部分)。これは将来のリリースで訂正される予定。

6265624

付属の ANT によって `java.lang.NoClassDefFoundError` がスローされる。

スレッド「main」で `java.lang.NoClassDefFoundError: org/apache/tools/ant/launch/Launcher` の例外がスローされます。

解決法

付属の ANT を Application Server の外部で使用することはお勧めできません。

ライフサイクル管理

ここでは、ライフサイクル管理に関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

6193449

要約

ejb-timer-service プロパティの `minimum-delivery-interval` を 9000 に設定したあとで ejb-timer-service プロパティの `redelivery-interval-in-millis` を 7000 に設定しようとする、次のエラーで `set` コマンドが失敗する。

```
[echo] Doing admin task set
[exec]
[Attribute(id=redelivery-interval-internal-in-millis)
: Redelivery-Interval should be greater than or equal
to Minimum-delivery-interval-in-millis (9,000)]
[exec] CLI137 Command set failed.
```

`minimum-delivery-interval` は、同一の周期タイマーの最小発生間隔。

`redelivery-interval-in-millis` は、失敗した `ejbTimeout` のあとに再発生を試みるまでタイマーサービスが待機する時間。

これは、再発生間隔のプロパティを最小発生間隔のプロパティと関連付けるロジックが間違っていて、GUI または CLI を使って再発生間隔よりも最小発生間隔が大きくなるような値を設定できないという問題です。

`minimum-delivery-interval-in-millis` を、ejb-timer-service プロパティの `redelivery-interval-in-millis` 以上の値に設定する必要があります。 `redelivery-interval-in-millis` の値が `minimum-delivery-interval-in-millis` の値よりも大きいことを確認する Application Server でのチェックに問題があります。

解決法

次のように、これらプロパティのデフォルト値を使用します。

```
minimum-delivery-interval (default)=7000
redelivery-interval-in-millis (default)=5000
```

これらデフォルト以外の値を指定するとエラーが発生します。

ログ

この節では、ログに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	要約
6180095	<p>access, failure についてデバッグ文を設定すると、Application Server の起動でハングアップする。</p> <p>JVM の java.security.debug オプションを設定すると、サーバーインスタンスの起動がデッドロックで動かなくなります。たとえば、domain.xml で</p> <pre><jvm-options>-Djava.security.debug=access,failure</jvm-options></pre> <p>の設定を行なうと、この問題が発生します。</p> <p>現時点ではありません。このフラグは設定しないでください。</p>

監視

ここでは、監視上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	要約
6174518	<p>HTTP サービスの監視統計には有益な情報を提示しないため、無視する必要があるものがある。</p> <p>HTTP サービスの一部の要素の監視統計を参照した場合、提示される値のいくつかは、現時点での値を反映していないか、常に 0 になっています。具体的には、次に挙げる HTTP サービス統計は Application Server に適用できる情報を提示しないため、無視する必要があります。</p> <p>http-service</p> <p>load1MinuteAverage</p> <p>load5MinuteAverage</p> <p>load15MinuteAverage</p> <p>rateBytesTransmitted</p> <p>rateBytesReceived</p> <p>pwc-thread-pool (要素)</p> <p>解決法</p> <p>これらの監視情報は将来のリリースで削除され、より適切な情報で置き換えられる予定です。</p>

バグ ID

6191092

要約

該当する監視名を持つ統計をすべて削除した場合でも、配備を取り消された EJB モジュールに対する監視 MBean が削除されない。

次に例を示します。

```
EJBModuleMonitorMap().size() = 1 eventhough ejb module is undeployed  
EJBModu
```

これは、EJB モジュールとアプリケーションの両方に当てはまります。MBeanAPI 経由のプログラムを使っても、`asadmin list/get` を使っても、空の監視 MBean が残っています。

診断

`asadmin list -m "server.applications"` を実行すると、次の出力が得られます。

```
server.applications.MEjbApp  
server.applications.__ejb_container_timer_app  
server.applications.adminapp  
server.applications.admingui  
server.applications.com_sun_web_ui  
server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_applicatio  
ns_j2ee-
```

次のようにして統計を調べることができます。

```
bin/asadmin list -m "server.applications._expo  
rt_install_nov-11_domains_domain1_applications_j2ee-modules_sqe_ejb_  
s1_01"  
server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_applicatio  
ns_j2eeules_  
sqe_ejb_s1_01.SQEMessage  
server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_applicatio  
ns_j2eeules_  
sqe_ejb_s1_01.TheGreeter
```

いったん配備を取り消します。

```
_export_install_nov-11_domains_domain1_applications_j2ee-modules_sq  
e_ejb_s1_0
```

ここで `list` コマンドを実行すると、まだアプリケーションが残っています。

バグ ID

要約

```
asadmin list -m "server.applications"  
server.applications.MEjbApp  
server.applications.__ejb_container_timer_app  
server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_applicatio  
ns_j2eeules_sqe_ejb_s1_01  
server.applications.adminapp  
server.applications.admingui  
server.applications.com_sun_web_ui
```

しかし、何の監視統計も含まれていません。

```
asadmin list -m "server.applications._expo  
rt_install_nov-11_domains_domain1_applications_j2ee-modules_sqe_ejb_  
s1_01"
```

server.applications.-export-install-nov-11-domains-domain1
applications-j2ee-modules-sqe-ebb-s1-01 で表示するものではありません。

ある文字列で始まる有効な名前を取得するには、ワイルドカード文字 (「*」) を使用します。

たとえば、`server` で始まるすべての監視可能エンティティの名前を一覧表示するには、

`list "server.*"` を使用します。

解決法

これは無害です。何の問題もなくモジュールを再配備できます。ルート監視 MBean は削除されませんが、その内容は空です。

PointBase

ここでは、PointBase に関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	要約
6184797	<p>アプリケーションの接続プールに対して遮断レベルを設定すると、PointBase で例外が発生する。</p> <p>PointBase データベースを指す JDBC 接続プールについて、<code>transaction-isolation-level</code> プール属性をデフォルト (<code>Connection.TRANSACTION_READ_COMMITTED</code>) 以外の値に設定すると、例外が発生します。ただし、その他のデータベースを指すプールについてデフォルト以外の値にこのパラメータを設定しても、例外はスローされません。</p> <p><i>解決法</i></p> <p>PointBase データベースを指す JDBC 接続プールについては、<code>transaction-isolation-level</code> を設定しないでください。</p>
6204925	<p>ネットワークサーバードライバと組み込みドライバを一緒に使用すると、PointBase が例外をスローする。</p> <p>ネットワークサーバードライバと組み込みドライバを同時に使用すると、PointBase が例外をスローすることがあります。</p> <p><i>解決法</i></p> <p>組み込みドライバとネットワークサーバードライバの両方ではなく、どちらか一方だけを使用してください。</p>
6264969,6275448	<p>デフォルトの PointBase データベースが上書きされるというアップグレードの問題がある。</p> <p>Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 にアップグレードすると、アップデトリリースパッチによって Pointbase デフォルトデータベースが上書きされます。</p> <p><i>解決法</i></p> <p>アップグレードの前に存在していたスキーマまたはデータを、すべて再作成または再入力します。テーブル生成オプションを使用して、CMP Beans を含むアプリケーションを配備した場合は、テーブルを再作成するために、アプリケーションの配備の取り消しまたは再配備を行う必要があります。</p>

サンプル

ここでは、Application Server 8.1 製品に付属するサンプルコードに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID
6195092

要約

setup-one-machine-cluster が、Windows ではハングアップし、Solaris では動作する。mqfailover を Ctrl+C でキャンセルし、再実行する必要がある。

install_dir%samples%ee-samples%failover%apps%mqfailover%docs%index.html から、次のコマンドを実行します。

- コンソール 1

```
cd install_dir%samples%ee-samples asant  
start-mq-master-broker1
```

- コンソール 2

```
cd install_dir%samples%ee-samples asant  
start-mq-cluster-broker1
```

- コンソール 3

```
cd install_dir%samples%ee-samples asant  
start-mq-cluster-broker2
```

- コンソール 4

```
cd install_dir%samples%ee-samples asadmin  
start-domain domain1
```

asant setup-one-machine-cluster-without-ha または asant setup-one-machine-cluster-with-ha を別の Enterprise Edition 用にすでに実行している場合は

asant configure-mq を、それ以外の場合には

asant setup-one-machine-cluster-and-configure-mq を実行します。この場合、次に示すように、コマンドが正常に実行されたように見えます。

```
start_nodeagent: [echo] Start the node agent  
cluster1-nodeagent [exec] Comman
```

しかし、このあとシステムはハングアップします。

解決法

現時点ではありません。この問題は、Windows でこの ant ターゲットを使用するすべての Enterprise Edition サンプルに同様に影響します。回避策は、ハングアップしたプロセスを Ctrl+C でキャンセルしてから再実行することです。

バグ ID
6198003

要約

MQ フェイルオーバーのサンプルアプリケーションを実行する前に、`asadmin deploy` 命令のあとで JMS リソースを作成する必要があることが、マニュアルに明記されていない。

次のエラーがスローされます。

```
Install_Location>%AppServer%domains%domain1%config%sun-acc.xml -name MQFailoverTestClient -t Nov 18, 2004 10:50:17 PM
com.sun.enterprise.naming.NamingManagerImpl
bindObjects SEVERE: NAM0006: JMS Destination object not found: jms/durable/TopicA Nov 18, 2004 10:50:18 PM
com.sun.enterprise.naming.NamingManagerImpl
bindObjects SEVERE: javax.naming.NameNotFoundException
javax.naming.NameNotFoundException
```

`asadmin deploy` コマンドを使って手動配備を行う場合に JMS リソースを手動で作成する必要があること、そして、サンプルアプリケーションを配備するために用意されている `ant` ターゲットを使用する必要があることが、マニュアルに明記されていません。

解決法

`build.xml` スクリプト用に `asant deploy` ターゲットを使用します。これにより、アプリケーションを実行するために必要とされる JMS リソースが作成されます。

セキュリティ

ここでは、Application Server と Web アプリケーションのセキュリティおよび証明書に関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID

6183318

要約

Enterprise Edition 上の WebServiceSecurity アプリケーションを J2SE 5.0 で実行できない。

WebServiceSecurity アプリケーションは、次の理由により、J2SE 5.0 では実行できません。

- J2SE 5.0 の PKCS11 は、UNWRAP モードをサポートしない
- J2SE 5.0 PKCS11 は、PKCS11 による

RSA/ECB/OAEPWithSHA1AndMGF1Padding をサポートしない

J2SE チームは、このバグについて「CR 6190389: Add support for the RSA-PKCS1 and RSA-OAEP wrap/unwrap mechanisms」をファイルしています。

解決法

J2SE 1.4.2 で別の JCE プロバイダ (デフォルトで含まれているもの以外) を使用します。この構成では、ハードウェアアクセラレータはサポートされません。

Web コンテナ

ここでは、Web コンテナに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID 要約

5004315 Windows で、`--precompilejsp=true` を使用してアプリケーションを配備すると、そのアプリケーションの JAR ファイルがロックされ、その後の配備取り消しや再配備が失敗することがある。

Windows にアプリケーションを配備するときに JSP のプリコンパイルを要求すると、それ以降、そのアプリケーションの配備取り消しや、そのアプリケーション (または同一モジュール ID を持つ任意のアプリケーション) の再配備を試みても、予期したとおりに動作しません。この問題は、JSP のプリコンパイル処理でアプリケーションの JAR ファイルが開かれたまま閉じられないため、配備取り消し時のこれらのファイルの削除や、再配備時のこれらのファイルの上書きを Windows が許可しないことにあります。

配備取り消しは、Application Server からアプリケーションが論理的に削除されるという点では成功します。また、`asadmin` ユーティリティーからエラーメッセージは返されませんが、そのアプリケーションのディレクトリとロックされた `jar` ファイルはサーバー上に残っています。サーバーのログファイルには、ファイルとアプリケーションディレクトリの削除に失敗した旨のメッセージが出力されます。

配備取り消し後のアプリケーションの再配備が失敗するのは、既存のファイルとディレクトリをサーバーが削除しようとして失敗するからです。これは、最初に配備されたアプリケーションと同じモジュール ID を持つアプリケーションを配備しようとしたときにも発生します。アプリケーションのファイルを保持するディレクトリの名前を、サーバーはモジュール ID から決定するからです。

同様の理由から、配備取り消しをせずにアプリケーションを再配備しようとするとう失敗します。

診断

アプリケーションを再配備しようとする、または、配備取り消しを行ってから配備しようとする、`asadmin` ユーティリティーは次のようなエラーを返します。

```
An exception occurred while running the command. The exception message is: CL
```

解決法

アプリケーションを配備するときに `--precompilejsps=false` (デフォルトの設定) を指定すると、この問題は発生しません。そのアプリケーションを最初に使用するとき JSP コンパイルが起動されるため、最初の要求に対する応答時間は、その後の要求に比べて長くなります。

また、プリコンパイルを行う場合には、そのアプリケーションを配備取り消しまたは再配備する前に、サーバーを終了して再起動する必要があります。シャットダウンすると、ロックされている JAR ファイルが解放されるため、再起動後の配備取り消しや再配備が成功します。

バグ ID

要約

6172006

空の `<load-on-startup>` 要素を持つ Servlet 2.4 ベースの `web.xml` を含んだ WAR ファイルを配備できない。

`web.xml` のオプションの `load-on-startup` 要素は、サーブレットを宣言する Web アプリケーションの起動の一環として、そのサーブレットをロードおよび初期化すべきことを示します。

この要素のオプションの内容は、Web アプリケーションのその他のサーブレットとの関係で、そのサーブレットをロードおよび初期化する順序を示す整数です。空の `<load-on-startup>` は、そのサーブレットを含む Web アプリケーションの起動時にそのサーブレットがロードおよび初期化される場合、その順序は意味を持たないことを表します。

`web.xml` の Servlet 2.4 スキーマでは、空の `<load-on-startup>` はサポートされなくなりました。つまり、Servlet 2.4 ベースの `web.xml` を使用する場合には、整数の値を指定する必要があります。`< load-on-startup/>` の場合と同様に、空の `<load-on-startup>` を指定すると、`web.xml` の Servlet 2.4 スキーマに対する妥当性検証で `web.xml` が失敗するため、Web アプリケーションの配備も失敗します。

下位互換性の問題もあります。空の `<load-on-startup>` は、Servlet 2.3 ベースの `web.xml` では有効です。

解決法

Servlet 2.4 ベースの `web.xml` を使用する場合、サーブレットをロードする順序が問題にならないことを示すには、`<load-on-startup>0</load-on-startup>` を指定します。

バグ ID 要約

6184122 リソースに制約のあるサーバー上で JSP ページをコンパイルできない。

JSP ページにアクセスしてもコンパイルに失敗し、サーバーログには「Unable to execute command」というエラーメッセージと次のスタックトレースが記録されます。

```
at org.apache.tools.ant.taskdefs.Execute$Java13CommandLauncher.exec(Execute.j
at org.apache.tools.ant.taskdefs.Execute.execute(Execute.java:427)
at org.apache.tools.ant.taskdefs.compilers.DefaultCompilerAdapter.executeExte
at org.apache.tools.ant.taskdefs.compilers.JavacExternal.execute(JavacExterna
at org.apache.tools.ant.taskdefs.Javac.compile(Javac.java:842)
at org.apache.tools.ant.taskdefs.Javac.execute(Javac.java:682)
at org.apache.jasper.compiler.Compiler.generateClass(Compiler.java:396)
```

解決法

JSP のコンパイルスイッチを「fork」から「false」に設定します。

これは、次のいずれかの方法で行えます。

- JspServlet の fork init パラメータを

`/${S1AS_HOME}/domains/domain1/config/default-web.xml` でグローバルに false に設定します。

```
<servlet> <servlet-name>jsp</servlet-name>
<servlet-class>org.apache.jasper.servlet.JspServlet</servlet-class>
.... <
<param-name>fork</param-name> <param-value>>false</param-value>
</init-para
```

- Web アプリケーションごとに、`sun-web.xml` の JSP 設定プロパティ `fork` を false に設定します。次のようにします。

```
<sun-web-app> <jsp-config> <property name="fork" value="false" />
</jsp-co
```

これらのいずれかを設定することにより、ant が javac コンパイルのための新規プロセスを生成することが防止されます。

バグ ID

要約

6188932

Application Server で auth-passthrough Web Server 6.1 アドオンがサポートされない。

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 では、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 7.1 で使用できる auth-passthrough プラグイン機能に対するサポートが追加されています。ただし、Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 での auth-passthrough プラグイン機能の設定方法は異なります。

Application Server Enterprise Edition 7.1 での auth-passthrough プラグイン機能は次に示す 2 層配備のシナリオで有効でした。

- Application Server インスタンスは、企業ファイアウォールの内側にある 2 番目のファイアウォールによって保護される。
- Application Server インスタンスへの直接のクライアント接続は許可されない。

このようなネットワークアーキテクチャの場合、クライアントは、service-passthrough プラグイン関数で設定されたフロントエンド Web サーバーに接続し、HTTP 要求を、プロキシされた Application Server インスタンスに転送して処理します。Application Server インスタンスは、要求をクライアントホストから直接ではなく、Web サーバープロキシからしか受信できません。その結果、プロキシされた Application Server インスタンス上に配備され、クライアントの IP アドレスなどのクライアント情報を照会する任意のアプリケーションは、中継された要求の実際の発信元ホストであるプロキシホストの IP を受信します。

Application Server Enterprise Edition 7.1 では、プロキシされた Application Server インスタンス上で、そのインスタンス上に配備された任意のアプリケーションがリモートクライアントの情報を直接使用するように auth-passthrough プラグイン関数を設定できました。その場合は、プロキシされた Application Server インスタンスが service-passthrough プラグインを実行している 中間の Web サーバー経由ではなく、要求を直接に受信したかのように見えます。

Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 では、domain.xml 内の <http-service> 要素の authPassthroughEnabled プロパティを TRUE に設定することにより、auth-passthrough 機能を有効にすることができます。次に例を示します。

```
<property name="authPassthroughEnabled" value="true"/>
```

Application Server Enterprise Edition 7.1 にある auth-passthrough プラグイン関数のセキュリティに関する同じ注意点が、Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 にある authPassthroughEnabled プロパティにも適用されます。authPassthroughEnabled によって、認証目的に使用される可能性のある情報 (要求発信元の IP アドレスや SSL クライアント証明書など) を上書きすることが可能になるため、authPassthroughEnabled set を TRUE に設定して、Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 インスタンスへの接続を許可する場合は、その対象を信頼できるクライアントまたはサーバーだけに限定することがきわめて重要です。予防措置として、authPassthroughEnabled を TRUE に設定するのは、企業ファイアウォールの内側にあるサーバーだけにすることをお勧めします。インターネット経由でアクセス可能なサーバーでは、決して authPassthroughEnabled を TRUE に設定しないでください。

プロキシ Web サーバーが service-passthrough プラグインを使用して設定されており、要求を authPassthroughEnabled が TRUE に設定された Application Server 8.1 Update 2 インスタンスに転送するシナリオでは、SSL クライアント認証は Web サーバープロキシ上で有効になり、プロキシされた Application Server 8.1 Update 2 インスタンス上で無効になる可能性があることに注意してください。この場合、プロキシされた Application Server 8.1 Update 2 インスタンスは、SSL 経由で認証されたかのように引き続き要求を処理し、クライアントの SSL 証明書を、それを要求している配備されたすべてのアプリケーションに提供します。

バグ ID	要約
6314126	Windows プラットフォームで任意の Sun Application Server を実行している、またはインストールしている場合は、ファイルシステムを FAT または FAT32 ではなく、NTFS にする必要があります。

ロードバランサ

ユーザーが、Configure Manually After Installation モードでロードバランサを設定するときに CLI に次のエンタリを指定する必要があります

ロードバランサのプラグインは、ASConfigurator.properties ファイルの AS_WSINSTANCENAME に使用されるサーバーでポート 1111 および 1112 を使用するように設定されています。Configure Manually After Installation モードでロードバランサを設定する前に、次のエンタリをコマンド行インタフェースに指定する必要があります。

- AS_WSINSTALLDIR= [INSTALLDIR] ¥¥WebServer
- AS_WSINSTANCEDIR= [INSTALLDIR] ¥¥WebServer¥¥ [INSTANCENAME]
- AS_WSINSTANCENAME= [INSTANCENAME]

ここで、INSTANCENAME は、現在の Web サーバーインスタンス名です。

- AS_LB_PLUGIN_TYPE=Sun ONE Web Server

回避策

ありません。

ロードバランサのプラグインが、ポート 1111 および 1112 を使用するように設定されている

ロードバランサのプラグインは、デフォルトでは、ASConfigurator.properties ファイルでポート 1111 および 1112 を使用するように設定されています。

回避策

ありません。

Application Server のインストール動作および Application Server のコンポーネントが JES Solaris/Linux 版に対応していない (6290539)

Windows では、Application Server を選択した場合、デフォルトですべてのサブコンポーネントが選択されます。これは MSI の動作です。ユーザーは、ロードバランサやノードエージェントなど、必要でない特定のサブコンポーネントを選択解除する必要があります。

Windows では、Application Server は HADB でハードウェアに依存しています。そのため、ユーザーはインストール中に自動的に設定モードで、HADB を選択解除して Application Server をインストールすることはできません。ただし、インストール後に手動で設定モードでは HADB を選択解除することができます。

設定

Configure Manually after Installation の初期設定には、GUI がない
Configure Manually after Installation モードの初期設定では、GUI をサポートしていません。

回避策

Configure Manually after Installation モードでの設定用として、CLI が提供されています。

Configure Manually after Installation を使用して Application Server を設定するときに、デフォルト設定のノードエージェントを受け入れなければならない (6372244)

回避策

Configure Manually after Installation モードで設定中は、Nodeagent 名のデフォルト値 (nodeagents) を受け入れます。

-server オプションを使用してサーバーを起動できない (6369978)

回避策

<Application_Server_Home>%config%asenv.bat ファイルの変数 AS_NATIVE_LAUNCHER_LIB_PREFIX の値のスラッシュをバックスラッシュに変更します。

すなわち、/jre/bin/client の値を %jre%bin%client に変更します。

パフォーマンス要件により、%jre%bin%server も使用できます。

インストール中に自動的に設定では、Application Server をコンテナとして使用している場合、アプリケーションを配備するのに使用されるインスタンス名が「Appserver1」になる。使用されるインスタンス名が「server」となる Solaris とはこの点が異なる (6287671)

再配布可能なファイル

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 には、配布可能なファイルは含まれていません。

問題の報告およびフィードバックの方法

Application Server 製品について問題が発生した場合は、次のリソースをご利用ください。

- J2EE-INTEREST リスト - J2EE に関する疑問を扱うメーリングリストには、次の URL でアクセスできます。

<http://archives.java.sun.com/archives/j2ee-interest.html>

- Java Developer Connection のバグデータベース - バグを閲覧または報告するには、次の URL にある Java Developer Connection Bug Parade をご利用ください。

<http://developer.java.sun.com/servlet/SessionServlet?url=/developer/bugParade/index.jshtml>

- Java Technology Forums - Java のテクノロジーとプログラミング技法に関する知識と疑問を共有するための対話型掲示板です。Sun Java System Application Server 8 Platform Edition 製品について議論するには、この J2EE SDK フォーラムをご利用ください。

<http://forum.java.sun.com/>

コメントの送付先

Sun では、マニュアルの改善に努めており、お客様のご意見、ご提案をお待ちしております。Sun へのフィードバックを送信するには、次の Web サイトのフォームを使用してください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

該当するフィールドに、マニュアルの正式なタイトルと Part No. を入力してください。Part No. は、7桁か9桁の番号で、マニュアルのタイトルページまたは最初のページに記載されています。たとえば、このリリースノート Part No. は 819-5815 です。

補足情報

次の場所から Sun Java System についての有益な情報を入手することができます。

- Application Server 製品情報
<http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-2551>
- Sun Java 開発者リソース
<http://developer.java.sun.com/>
- Sun Java 2 Platform、Enterprise Edition (J2EE) のサイト
<http://java.sun.com/j2ee/>
- Application Server の製品マニュアル
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/slappsrv?l=ja#hic>
- Sun Microsystems の製品マニュアル
<http://docs.sun.com/>

Copyright © 2006 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.

本書で説明する製品で使用されている技術に関連した知的所有権は、Sun Microsystems, Inc. に帰属します。特に、制限を受けることなく、この知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> の一覧に示される米国特許、および米国をはじめとする他の国々で取得された、または申請中の特許などが含まれています。

SUN PROPRIETARY/CONFIDENTIAL.

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

使用は、使用許諾契約の条項に従うものとします。

本製品には、サードパーティーが開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいて開発されている場合があります。

Sun、Sun Microsystems、Sun ロゴ、Java、および Solaris は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用されている、米国および他の国々における同社の商標または登録商標です。

